

学校生活の一葉

一九〇一年の夏の江南水師学堂に入り、“インド読本”を読んで、経史子集の他にも“これがわたしの新書だ”というものがあることを初めて知った。しかし学校の授業は鍋炉とか——先輩の話では、ただ“ボオロウ”としか言わず、これの訳語は使わなかった——あるいは経度緯度の類に重点を置いたので、英文の読本は門を敲く瓦でしかなかった。それでその“インド読本”は第四集までしか配給されず、以後はもっぱら鍋炉をいじり、“太陽が休みに行くと、ミツバチは花むらを離れた”という詩に親しむ機会はぐんと少なくなった。字引も商務印書館の『華英字典』が一冊配給されただけで、（もう一冊『ナダール英文字典』があった）、表には『華英』と書いてあったが、実は英華であった。わたしたちがもらったのはたぶんまだ初版であったが、そのなかには嬰童^{カゲマ}という意味のことば——原文はすでに忘れた——があつて、それは極めて通俗な言葉で注解がしてあった、これは特別な標識で、わたしたちより一年下の人がもらった本にはすでにこの一条はなくなっていた。こうした状況であったから、みんなはその“新書”を読んだことは読んだけれども、あいかわらず新書の面白みがわからず、多くの先輩は学校を出るや、字引も読本もそっくり投げ出して、もう見ようとしなかったのは、まさに当然のことであった。

“インド読本”以外にわたしが見た新書は、最初が日本から手に入れた一冊『天方夜談』である。これはロンドンのニューズ発行の三シリング半の挿絵本で、その中にはアラジンがランプを持っている図と、アリババの女奴隷が短刀を持って舞っている図とがあり、今でもだいたい覚えている。当時この本はわたしにとって一種驚異であったばかりか、字引を打ち捨てて船で仕事をしていた同級生が見てこんなもの見たことがないと言って、借りてゆき回覧して、その後誰の手に渡ったのやら、追求しようがなくなった。思うにたとい失くさなくとも読まれてボロボロになっていたはずだ。しかしこの本が姿を消す前に、わたしはそれを利用して、“初めての小手調べ”をやった。『天方夜談』のなかの「アリババと四十人の盗賊」は世界でも有名な物語であり、わたしはそれを読んでとても面白く思い、次々と訳して行つた、——当然古文でしかも多くの誤訳と省略を引き連れて。そのころわたしと同じクラスの友人陳君が蘇州出版の『女子世界』を定期購読していたので、わたしは“萍雲”という女の名前をつけて、訳稿をそこへ送った。すると間もなくそれが載って、しかも後からまた印刷されて、『侠女奴』という書名の単行本になった。その時の成功で、わたしは嬉しくなつて、またアメリカのアラン・ポー (E. Allen Poe) の小説『黄金虫』を訳し、名を『山羊の図』と改めて、また女子世界社の丁君に送ったら、彼は承知してくれて小説林から出すことになり、名前も『玉虫縁』と改めた。ⁱ 訳者の名前については“碧羅女士”！とした。これは多分いずれも一九〇四年のことだったろう。最近青年がよく新聞の通信欄に好んで姉妹の名を使つたり、あるいは何とか女士と自署するのを見て、思わずひとり微笑するのは、決して嘲弄の意味ではなく、それにつれて十八九年前のことを思い出し、青年の感傷的な心情を理解できるように思って、同情の微笑を禁じ得ないのである。

その後また何冊か文学の書物を手に入れたが、皆ドレの挿絵のある『神曲地獄篇』、カーライル (Caryle) の『英雄崇拜論』の類で、利用しようがなかった。そのころ蘇子谷〔曼珠〕が上海

の新聞に『惨世界』〔レ・ミゼラブル〕を訳し、梁任公がまた『新小説』でよく“ユゴー”のことを述べていたので、わたしたちはすぐユゴーの崇拜者になり、苦心惨憺して彼の著作を求め、やっとの事で何とか十六円の金をかき集め、一部八冊のアメリカ版の『ユゴー選集』を買うことができた。これは今まで見たこともない大部の本だったが、あまりに多くあまりに長いので、やっぱりそれほどは読めず、ただ『死刑囚の末日』と Claude Gueuz の二篇を取り出しては読むのだった。一九〇六年の夏魚雷堂の空き部屋に住んで、突如小説を書こうと発心し、名を『孤児記』と決め孤児の生活を叙述した。ⁱⁱ 前半分は創造で、全部自分の貧弱な想像で持ちこたえたが、孤児が盗賊になってからは続けられず、そこでユゴーの文章をそっくりそのまま放り込んで、孤児の後半生はとうとう Claude になってしまった。この事実は凡例上で声明してなくて、今ではもうはっきりおぼえておらず、署名に使った二字さえ忘れてしまった。この小説は全部で約二万字、直接『小説林』に送ったところ、受け入れてくれ、しかも報酬洋銀二十円であった。これはわたしが初めて手にした工賃で、以前の二部の女性の訳書は五十部の書物を受け取っただけであった。この二十円を持って張季直が開いていた洋品店で白いズックの鞆を買い、その余りは帰郷の旅費に使った。

以上はわたしが本国の学校にいたころの読書と著作の生活である。その三種の小書は僥倖なことにはいまではとっくに絶版になって、たといい好奇心の強い人でもなかなか見つけられないだろう。これはとてもよい事である。なぜならそれらは実際人に見せる価値がないからである。しかしわたし自身にとってはそうではない、これは別に自分の物は何でも好いとかではなく、それらはわたしの過去の作品であり、わたしの生活の過程を示しているので、回想の中ではまだ価値があり、しかも自分のこうした体験によって、現在および未来の後生の心情がほぼ理解でき、血気のあまり彼らをおどしつけるには至らない。これはわたしの最も喜ぶところである。わたしは過去の経験がわたしたちにとって何かしら役に立つところがあるならば、これがおそらく最も重要な点だろうと思うのだ。

※初出：1922年12月1日『晨报副刊』

ⁱ 『侠女奴』『玉虫縁』 『周作人訳文全集』第11巻所収。なお女性の名を署したことについては森雅子「周作人の文学的出発——或る女性の影」（『中国文学報』69）の考証がある。

ⁱⁱ 『孤児記』 『周作人訳文全集』第11巻所収。